

日本の大学博物館の設立に関する研究

A Study on the Establishment of University Museums in Japan

田川 太一*

Taichi TAGAWA

要旨

大学博物館は大学に附属する博物館施設である。一般の博物館と同様に博物館の4大機能を有しているが、利用者の対象は限られることが多く、一般の博物館と異なる性質も有している。

本稿は、大学博物館設立史における初期に設置された大学博物館を、①. 既存の博物館が附属施設となった大学博物館、②. 大学設立時に設置された大学博物館、③. ①及び②が含まれる大学博物館の3つに分類し、設立経緯を先行研究及び文献資料を通して、日本における初期に設置された大学博物館の傾向・特徴について考察し、明確にするものである。

キーワード：大学博物館、大学南校、工部大学校博物場、展示資料の購入

I はじめに

大学博物館は、大学¹⁾に附属する博物館施設を指し、その主たる役割²⁾は、①在学生の実物教育の場、②教員の研究の場、③博物館学講座の実習の場、④一般市民の生涯学習の場であり、一般の博物館と同様に収集・保存、調査研究、展示、教育の機能を有している。しかし、利用者の対象は大学内の学生・教職員と外部研究者等に限定されることが多く、一般の博物館とは異なる性質も有している。

日本で大学博物館が設立されるのは、明治維新後の1870年代からであるが濫觴となる大学博物館は未だ明確ではない。椎名仙卓(1989)、守重信郎(2011)、加藤有次・矢島國雄(2011)は東京大学理学部博物場を日本における大学博物館の濫觴として挙げている。安高啓明(2014)は、小石川植物園(現在の東京大学大学院理学系研究科附属植物園)が植物園としては日本の大学博物館の最初期であるが、博物館の前身にあ

たる資料室・陳列室などになると東京大学理学部博物場が最初期であると論じている。また、西野嘉章(1996)は東京大学に初めて創られた博物館として工部大学校博物場を挙げ、大学博札幌農学校所属博物館の前身の一つである、札幌農学校演武場内標本室については関秀志(1991)が論じているが、いずれも大学博物館の濫觴とは明確にしていない。

本研究は、大学博物館設立史における初期に設置された大学博物館の設立経緯を先行研究及び文献資料を通して考察し、日本における初期に設置された大学博物館の傾向・特徴を明確にするものである³⁾。

II 大学博物館の定義

大学博物館について西野(1996:1-2)は、「大学博物館は学問の体系に則って収集された学術標本コレクションを恒久的に保存・管理する保管施設であると同時に、学内の教育研究を支援する基盤施設であ

*長崎国際大学大学院人間社会学研究科観光学専攻修士課程1年

り、かつまた先端的な知と情報を創出・発信する戦略施設」と定義しており、守重(2011:1)は、「大学博物館とは、大学内に設置された大学のことであり、大学における教育・研究の成果を保管・展示し、学内外に公開する施設である」と定義している。また、安高(2014:182)は附属図書館と比較し、「大学博物館は、利用者・来館者を制限するものではなく、地域社会と融合した公共機関の性格を有する。(中略)大学博物館は学内を包含した学外を対象とした“知の拠点”である」と定義している。

さらに、1996(平成8)年1月に学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会(1996)より出された「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について(報告)一学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について一」では以下のように定義されている。

ミュージアム(大学博物館)とは、大学において収集・生成された有形の学術標本を整理、保存し、公開・展示し、その情報を提供するとともに、これらの学術標本を対象に組織的に独自の研究・教育を行い、学術研究と高等教育に資することを目的とした施設である。加えて、「社会に開かれた大学」の窓口としての展示や講演会棟を通じ、人々の多様な学習ニーズにこたえることができる施設でもある(後略)。

(括弧内は筆者加筆)

本研究における大学博物館は、これらの定義及び博物館法(第一章第二条)⁴⁾、教育基本法(第二章第七条)⁵⁾、学校教育法(第九章第八十三条)⁶⁾の3つの法律を踏まえ以下のように定義する。

「大学博物館は、学術の中心として高い教養と専門的能力を培い、教育及び研究を行う大学の附属機関として設置され、大学において、学問の体系に則って収集・生成された博物館資料⁷⁾を保管(育成)し、これら

に関する独自の調査研究を行い、学術研究と高等教育に資することを目的とした基盤施設である。

また、資料を展示して教育的配慮の下に学内全ての教職員・学生及び一般公衆(学外者)の利用に供し、その教養、学習、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行う機関であり、大学において附属図書館と同様に“知の拠点”となる施設である。」

Ⅲ 日本における大学博物館の起源

1871(明治4)年、明治政府は殖産興業の一環として博覧会を開催したが、この計画は物産調査を行っていた大学南校物産局により計画が進められたものである。

「日本の博物館の父」と称される田中芳男は、同じく物産局に出仕していた町田久成らと共に博物館創設の意図の下、物産局の局員を各地に派遣し、各種物産資料の調査収集に努めた。その後、全国から集められた膨大な資料を展示するための場所、つまり博物館の設置場所を「九段坂上三番薬園」に決め、主催には「大学南校博物館」の名称を用いて、博覧会開催計画が進められた。

この計画について、棚橋源太郎(1950:37)は以下の如く述べている。

(前略)田中氏は大學大丞町田久成氏等と謀り、博物館創設の意圖の下に、物産局の官員を廣く府外に派遣し、各種物産の調査蒐集に力めた。その結果全國から資料が集り、在來の建物では漸次狹隘を感じて來たので、擴張の必要を感じ、明治四年九段坂上麴町藥園を以て博物館建設地と定めた。然し、博物館の建設は仲々容易なことではないから、先ず同所に博覽會を開くこととし(後略)。

九段坂上三番薬園は、江戸幕府の西洋医学所に設置された薬草園があった場所であ

るが、東京府の管理の後は大学南校に移管された。

博覧会は、1871（明治4）年5月5日から31日までの開催を予定し、さらなる資料の収集のために「大學南校博覧會趣意書」を全国に配布し、多くの資料が収集された。陳列された出品物は、物産局が収集したものに加え、1867（慶應3）年、日本が初めて参加した第5回パリ万国博覧会からの持ち帰り品と有志者から寄贈されたものである。そのほとんどは、動物・植物・鉱物などの博物標本が中心であったが、究理器機・医科器材・陶器や古物などもわずかに陳列された。後の東京大学理学部博物場の設立に大きく寄与したエドワード・シルベスター・モース（Edward Sylvester Morse, 1838～1925）とも親交を深めた官僚の蜷川式胤も古美術品を出品し、大学から賞状が送られている。

しかし、実施する段階でその規模が縮小され、博物館としての建物が建てられることはなく、名称は「博覧会」から「物産会」に変更され、主催も「大学南校博物館」から「大学南校物産局」に改称された。また、開催場所も三番薬園から江戸幕府の陸軍歩兵屯地が置かれていた、同じ九段坂上の「招魂社」の境内での開催となった。開催時期も招魂社の祭礼に合わせて、5月14日から21日までのわずか7日間のみで開催であった。

この博覧会について、棚橋（1950：37）は以下の如く述べている。

この展覧會は本邦初めての企てであったので、小規模ながら頗る好評を博した。その結果宮内省では、吹上御所苑内御茶屋馬見所の建物を、これ等蒐集品の陳列に充て、天覽に供した。然し九段の展覧會は、これまでの同好の仲間で採集品を持ち寄つて、互に鑑賞或は研究に資した會とは異つて、特に庶民啓發の目的で、一般に公開された

ものであり、この種の公開展覧會としては、恐らく本邦最初のものとして差支ないだろう。

このように、天皇陛下も天覽した展覧会であったが、その内容は雑然と資料が置かれ、海外で開催されている近代的な博覧会とはかなりかけ離れたものであった（椎名2000：51）。

1871（明治4）年7月18日に文部省が創設されるまでの大学は、単なる教育機関ではなく、中央教育行政官庁としての機能も兼ね備えていた。そのため、この博覧会は教育機関としての大学南校ではなく、国の機関としての大学南校が主催した博覧会であると言える。

しかし、この博覧会に出品された資料は、天皇陛下及び一般に先立ち、物産局内に陳列されて大学南校の生徒達に公開された。町田久成は文部省への報告書の中で「同年同月（明治四年四月）二十二日一、今日より局中の物品飾付南校生徒に縦覧相許候事」と記しており⁸⁾、これは教育の場である学校において、学術標本として展示された最も早い記述であると考えられる。木下直之（1997）⁹⁾は、「内務省の管轄下にあったこの時期の博物館はまだ、これら大学博物館（工部大学校博物場と東京大学理学部博物場）のモデルたりえたはずである。（括弧内は筆者）」と述べている。

以上の事から、大学南校物産局主催の物産会は、教育機関としての大学が主催する博覧会ではなかったが、後の東京大学の前身であり、教育機関として当時の最高学府の一つであった大学南校内に展示され、そこに通う生徒達に公開されたことは、日本における「大学博物館」の起源と見なすことができ、特筆すべき点といえる。

IV 初期に設置された大学博物館の 設立経緯

大学博物館設立史における初期の大学博物館は、①. 既存の博物館が附属施設となった大学博物館、②. 大学設立時に設置された大学博物館、③. ①及び②が含まれる大学博物館の3つに分類できる。

1. 小石川植物園

①の事例としては小石川植物園が挙げられる。その正式名称は、「東京大学大学院理学系研究科附属植物園」で、東京大学の附属植物園である。当該植物園は、1638（寛永15）年に3代将軍徳川家光治世の江戸幕府が、江戸の南北に開設した北薬園と南薬園を起源とする。

北薬園は、牛込にあり高田御薬園とも呼ばれていた。薬園の面積は18,000坪で、薬師堂や本草学の祖である神農を祀った神農堂があった。しかし、5代将軍綱吉が生母桂昌院の願いを受け、1681（天和元）年に北薬園の地を真言宗の僧である亮賢（1611～1687）に与え、護国寺の建立を命じたことにより閉園となった。南薬園は、面積16,000坪で品川（現在の港区南麻布周辺）に開設された。園内の一部には、大変な花好きで「花癖アリ」と称された2代将軍秀忠の影響から草花も栽培されて、麻布花畑とも呼ばれた。

南薬園は1711（正徳元）年に閉鎖されるが、1684（貞享元）年、綱吉が松田徳松として幼少時代を過ごした館林藩下屋敷の小石川御殿に一部が移され、「小石川薬園」あるいは「白山官園」と呼ばれる約14,520坪の薬園が新たに造園された。1721（享保6）年、8代将軍綱吉により小石川御殿の全敷地が薬園となり、総面積は44,800坪までに拡大され、多種多様の薬草が栽培された。その後、薬園は時代と共に衰退し、幕末には5,100坪ほどに縮小するが、廃園されるこ

となく幕府によって管理された。

大政奉還後、当該植物園の管理は幕府から明治政府に代わり、所属や名称が目まぐるしく変化した。初めて学校の管轄となるのは1869（明治2）年で、その名称は大学東校薬園となった。1877（明治10）年の東京大学設立に伴い、東京大学附属の植物園となり現在に至る。同年から職員と学生だけでなく、毎週日を定めて一般市民にも公開されるようになった。

2. 工部大学校博物場

②の事例の一つ目は、工部大学校博物場である。

明治政府は、近代日本の工業技術を促進するには学校教育が重要であると考え、外国人技術者に代わる日本人技術者を育成するための本格的な工業教育機関として、1871（明治4）年に工部省工学寮を創設し、小学校（school）と大学校（college）からなる工学校の設置を構想した。

しかし、初代教頭へのンリー・ダイアー（Henry Dyer, 1848～1918）が新たに設けた学則により、6年制の工学寮工学校が1873（明治6）年に開校した。開校当初は、大学校本館が完成していなかったことから、小学校校舎に予定されていた建物が臨



図1 工部大学校博物場
（『明治工業史 建築編』より転載）

時校舎として利用され、この臨時校舎の一部に博物場が設けられた。1877（明治10）年、工学寮が廃止され、工学寮工学校は工部大学校と改称された。同年には大学校本館が完成し、臨時校舎は博物場となったのである。

当該博物場は、専任の職員が3人配置され、主にイギリスから持ち込まれた資料が学部ごとに展示され、学生の製作品も展示された。ダイアーは、工学教育構想の中で施設や設備にも特段に配慮しており、図書館や実験室、博物室を設置することの教育効果を自覚し、観察・経験・実地という学習体験を重要視していた（加藤 2016：15）。このことから、全ての授業が英語で行われていた工部大学校の教育における博物場の必要性を説いていたことが読み取れる。

工部大学校学課並諸規則（1879：40-44）には以下の如く記されている。

第一節 本場ノ陳列品ハ各科教官ノ授業用及ヒ生徒ノ參觀ニ供シ且ツ世人ノ縦覽ヲ許ス（中略）第三節 場内各區部ノ陳列品ヲ整理監督スルハ各科主務教授ノ分掌スル所トス（中略）第七節 本場ハ本校課業ノ時間ハ毎日之ヲ開ク、但本校閉鎖ノ時間十五分前ニ於テ本場ヲ閉ス（後略）（下線は筆者）

以上の如く、博物場は開校日には毎日開館し、学校が閉まる15分前に閉館していた。また展示された資料は各学部の主任教授が整理・監督し、博物場の資料を講義に用いていたとある。さらに、下線部の「世人ノ縦覽ヲ許ス」からは、学生のみならず一般市民にも自由に公開されていたことが明記されている。

また、工部大学校には天皇皇后両陛下と皇太后が訪れており、1878（明治9）年12月13日付の読売新聞に以下の如く記されている。

先ごろ皇太后宮が工部大學校へ行啓
あらせられたとき博物館へ陳列して

あった西洋の婦人が小児を抱いて居ところの人形をお買上になって御秘藏であつたが人形の足が損じたゆゑ修覆のため大學校へお廻しに●り一昨日出來上って青山御所へ上げられました（下線は筆者）

この記事に掲載されている皇太后宮とは、明治天皇の嫡母で孝明天皇の女御である英照皇太后（1835～1897）と考えられ、下線部の「博物館に陳列してあつた（中略）人形をお買上になって」という文面から、皇太后が博物館において「モノ」つまり「展示資料」を購入していることが読み取れる。

皇太后だからこそ資料を購入できたのか、また一般庶民も購入できたのか否かは不確かであるが、現在の博物館では一般的ではない来館者による資料の購入ができたことは特筆すべき点といえる。

工部大学校は、1886（明治19）年の帝国大学令により東京大学工芸学部と合併し、帝国工科大学となった。これに伴い、当該博物場は廃止され、資料は各学科で管理されることになった。

○先ごろ皇太后宮が工部大學校へ行啓あらせられたとき
博物館へ陳列しあつた西洋の婦人が小児を抱いて
居ところの人形をお買上になつて御秘藏であつた人
形の足が損じたゆゑ修覆のため大學校へお廻しに
一昨日出來上って青山御所へ上げられました

図2 資料購入のことが読み取れる記事
（『讀賣新聞』より転載）

3. 東京大学理学部博物館

②の事例の2つ目は、東京大学理学部博物館である。

東京大学（1877～1886、後の東京帝国大学）は、1877（明治10）年に東京開成学校（大学南校）と東京医学校（大学東校）が合併し、法学部・理学部・文学部・医学部の4学部を設けて開校した。このうち、理学部に設置されていた標本室が東京大学理学部博物館の前身である。

標本室にはすでに、動物学標本300種、植物学標本531種が保存されていたが、初代動物学教授として招聘されたエドワード・シルベスター・モースは、この標本室を動植物学標本だけでなく、古器物学標本や鉱物学標本、化石など、幅広い分野の資料をそろえた総合的な博物館にする構想を大学当局に進言した。

文部省の『日本帝国文部省第六年報 明治十一年』（1878：20-21）には、以下の如く記されている。

（前略）理學部ニ於テ從來採集セシ所ノ工學採鑛學化學金石學地質學古生物學古物學動植物學等ニ關スル模型及ヒ標品等凡ソニ萬三千餘箇アルヲ以テ一ノ博物館ヲ設置センヲ議定セリト雖モ猶ホ未タ起工ニ至ラス（後略）

この年報からは、モース就任の翌年1878（明治11）年には博物館の設置及び開設の方針が決まっていたことが読み取れる。この進言により、動物学標本と植物学標本のみが所蔵されていた標本室に、新たに古物学標本（考古学資料）が加わり、1879（明治12）年に博品館という名称で開室するに至った。

『日本帝国文部省第八年報 明治十三年』（1880：450）の〔博物館設置ノ件〕には、「明治十三年三月三十一日東京外國語學校敷地内ニ在ル本部金石地質生物學標品陳列場ヲ博物館ト改稱シ（後略）」とあり、博品館は東京開成学校病舎（旧フルベッキ邸）に移され、1880（明治13）年3月に東京大学理学部博物館と改称された。

同年報（1880：48）の「書籍館博物館」の項には、以下の如く記されている。

東京大學理學部博物館ハ前年ヨリ其開設ニ著手セシカ本年ニ至リ建築全ク落成ス而シテ其物品ハ多年ノ蒐集ニ係ルヲ以テ品類甚タ多ク且ツ其排列ノ如キモ亦頗ル整備セリ乃チ其物品ノ總計ハ三萬二千九百八十一箇アリテ本館ヲ八區ニ分チ第一動物室第二植物室第三金石室第四地質及ヒ古生物室第五土木及ヒ器械模型室第六採鑛及ヒ冶金模型

表1 東京大学理学部博物館における資料の増減

品名	在来数	増数	減数	存在数
工学模型及び標本	1,140	41		1,181
採鉱及び冶金学模型標本	684	29		713
化学模型及び標本	1,294	52		1,346
金石及び地質学模型及び標本	9,063	1,403	300	10,166
古生物学標本	4,088	782		4,870
古物学標本	1,194	173		1,367
植物学標本	6,795	863	514	7,144
動物学標本	6,107	87		6,194
計				32,981

（「博物館模型及標品増減表（1880：467）」を参照に筆者作成）

室第七製造化學標品室第八古器物室トス（後略）

以上の如く、当該博物館は8つの部屋に分けられ、理学部の各教室から標本など32,981点が集められた。標本の点数は、同年報（1880：467）に記された「博物場模型及標品増減表」とも一致している。

また、同年報（1880：467）には「（前略）其本學年中ノ減數ハ金石、地質學標品三百個ヲ教育博物館へ贈り植物腊葉五百十五種ヲ米國花盛頓府スミソニヤン・インスチチューションニ贈付スルモノトス」とあり、教育博物館（現在の国立科学博物館）やアメリカの国立研究機関と交流していたことが理解できる。モースも、収蔵が乏しい資料は外国の博物館と交流し、豊富にある資料と不足している資料の交換を提案しており、この提案が実現していたことになる。

公開についても同年報（1880：48）の「書籍館博物館」の項に以下の如く記されている。

東京大學理學部博物場（中略）設立ノ主旨ハ元理學部各科教授ノ授業用及ヒ生徒ノ參觀ニ供スルニ在リト雖モ亦該場事務ノ整頓スルヲ待チ將ニ毎月數回ヲ期シテ有志者ノ縦覽ヲ許サントス（下線は筆者）

傍線の「將ニ」という表現からは、公開への強い意欲を窺うことができるが、その一方で、「有志者ノ縦覽」からは利用者を限定した公開であったことも窺える。実際に、1880（明治13）年7月頃には月1回博物場を有志者に公開していることが明らかになっている（西村ほか 2006：187）。

当該博物館は、1881（明治14）年に上野公園内で開かれた第二回内国勸業博覧会（3月1日～6月30日）での一般公開を予定していたが、文部卿河野敏謙の意向により、毎日曜日に地方の教育者や有志者で博覧会の観覧券を有する者に限定した公開となっ

た。この公開は、将来的に博物場を学外開放するためではなく、東京大学全体を観覧させる企画の一部として催されたにすぎず、一般市民の利用を図ったものではなかった。博覧会終了後も、日曜日みの公開が継続された。この公開については、東京日々新聞、郵便報知新聞、朝野新聞、讀賣新聞、東京横浜毎日新聞の各社に公告が出され、1881年7月1日～8日付の新聞に掲載されて、大学側が公開に前向きであったと言えるのである。

また、『文部省往復明治十六年分』には、「明治十四年中理學部博物場來觀人員 九百五拾九名 同臨時來觀人 開場ノ日ニアラスシテ特ニ觀覽ヲ乞フ者 六拾一名」とあり、日曜日以外にも訪れた来館者に対応していたことが記されている（西村ほか 2006：188）。

日曜日限定の公開は、約1年間（1881年7月1日～1882年7月15日）継続して行われたが、次第に学術利用重視の姿勢が強まり、1882（明治15）年からは増築のため、日曜日の観覧も中止となった。その後は、学内の利用者と事前に許可を得た研究者のみ特別に平日の閲覧が許されるようになり、以後、博物場の公開は1885（明治18）年6月1日まで行われた。

守重（2011：23）が「わが国最初の大学博物館がこのような性格を持っていた背景には、当時の東京大学が、わが国唯一の大学として、国家を担うエリート養成機関であったことが影響している」と論じているように、当時の大学には生涯学習や地域に開かれた大学という考えはなくエリートを養成する高等教育機関であった為に、そこに置かれた大学博物館も同様に、学術利用のための高等機関として置かれていたのである。

当該博物館は、開設から僅か5年後の1885（明治18）年9月に、東京神田区一橋通町（現在の東京都千代田区一ツ橋）に

あった理学部が本郷富士見町に移転するのに伴い閉鎖された。博物館に保管されていた膨大な標本資料などは、各学部の学生と教授の研究材料として活用するために、それぞれに分散されて保管された。

当時の大学学部総理加藤弘之は、理学部の移転先である本郷の加賀屋敷内の音楽取調所が同時期に上野へ移転したことから、文部省に改善増築見積書を宛てており、それには「理学部博物館ハ豫テ音楽取調所ニ於テ望ム趣ナレハ」とあり、旧音楽取調所に移転させる計画があったが実現には至らなかった（守重 2011：13）。各学部に分散、保管された資料は、1923（大正12）年の関東大震災によりその多くが焼失してしまうのである。

4. 札幌農学校所属博物館

③の事例は札幌農学校所属博物館で、その前身は、札幌仮博物館と札幌農学校演武場内標本室である。

札幌仮博物館は、開拓使が北海道開拓の促進及び進歩状況のアピールと殖民に関する資料を収集・展示する目的で、東京、札幌、函館に設置した博物館の1つで、1877（明治10）年に札幌の偕楽園内に設置された。博物館の収集資料が増え手狭になったことから、1882（明治15）年に開拓使の牧羊場内に新たに博物館が建設された。この建物は現在でも北海道大学植物園博物館本館（1989（平成元）年に国指定重要文化財に登録）として使用されており、現役の博物館建築としては日本最古の建物である。同年、開拓使廃止に伴い農商務省博物局の所管となる。博物館は、博物局局長の田中芳男の指示に従い、資料管理の体制が改善され、公衆に縦覧させることも目的となった。

この点について、加藤克（2008：37）は以下の如く論じている。

札幌仮博物館の設置目的にも「展覧

シテ衆庶ノ縦覧ヲ許」すという記述があるが、おそらく札幌仮博物館時代は、施設規模が小さく、職員数が少なかったこともあり、公開よりも開拓使の行政機関としての業務が優先される状況にあったものと推測される。この展示公開の重視という流れが札幌博物館における変化の一つと言えよう。

また、棚橋（1950：41）は札幌博物館について、「地方に於ける博物館施設の機運が、何んな状態に進んでゐたかと一瞥するならば、第一に目に附くのは北海道の札幌博物館の開設である。」とし、札幌博物館の設置が、地方博物館の創設であることを論じている。

もう一つの前身である札幌農学校演武場内標本室は、初代教頭のウィリアム・スミス・クラーク（William Smith Clark, 1826～1886）が提言し、2代目教頭のウィリアム・ホイラー（William Wheeler, 1851～1932）の構想により1878年に建設された札幌農学校演武場の1階に設置された。

この標本室の実態については不明な点が多く（加藤ほか 2009：32）、一般市民に公開されていたかは定かではないが、現在は札幌農学校と札幌市内の名所や文化財を紹介する資料館として開放され、札幌市時計台として札幌市の観光スポットになっている。

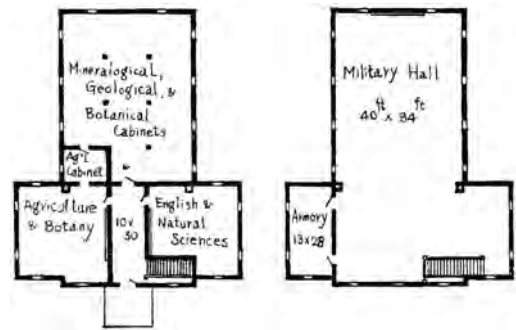


図3 演武場平面図

（「北大農学部附属博物館の建築—演武場と博物館・その2—」より転載）

1884（明治17）年、札幌博物場の所管が札幌農学校に移管された。これにより、博物場の資料と標本室の資料を統合した、札幌農学校所属博物館が設置された。札幌博物場時代の標本は展示資料として重要視されていたが、大学博物館としての役割が強化された博物館におけるの標本は、教育・研究資源としての活用が重要視されるようになり、収集される資料も展示用の剥製よりも研究用の標本が多数を占めるようになった¹⁰⁾。

また、クラークは開拓使に対し、「植物学および園芸学の教育のためには植物園が必要である。」と提言した（クラーク 1878）。これを受け、開拓使は園芸推奨のために建設していた温室と付属地3,600坪を1878（明治11）年に札幌農学校に移管し、移管後は植物学の教員により整備された。前述の通り、1884（明治17）年には札幌博物場と博物場が建つ土地が札幌農学校に移管されたことにより、この土地に植物園を設立することが決まり、1886（明治19）年に宮部金吾の計画・設計で、札幌農学校植物園が開園した。

開園当時、温室と博物館は日時を定めて公開されたが、植物園には1909（明治42）年まで自由に出入りすることができた。

Ⅶ おわりに

大学博物館設立史における3つの分類のうち初期の大学博物館に共通するのは、大学教育において博物館教育が重要視され、設置又は移管されている点である。モース、ダイアー、クラークが大学博物館を重要視していたことは述べてきた通りであり、小石川植物園が東京大学の附属施設となった経緯も、大学の研究と教育には植物園が必須であったからと言える。

異なる点は、小石川植物園と札幌農学校所属博物館が現存しているのに対し、工部

大学校博物場と東京大学理学部博物場は現存していない点である。現存していない2つの博物場はどちらも学校の合併や学部の移転を理由に閉鎖されているが、ダイアーやモースの意向を明治政府や大学側が引き継げなかったことも要因として考えられる。それに対して、現存している2つは、日本における本草学の発展に寄与したこと、さらに植物学教育のために設置されたなど、その目的が明確であり、大学における研究や教育と深く結びついていたことが現在まで継承されてきた理由と考えられる。

1684（貞享元）年に江戸幕府により設置され、1877（明治10）年に東京大学の附属施設となった小石川植物園は、歴史的に最も古く、且つ現存する最古の大学博物館である。また、棚橋（1950）が地方博物館の創設として挙げた札幌博物場と1877年に設置された札幌農学校演武場内標本室を統合して設置した札幌農学校博物館は、地方の大学に設置された大学博物館の濫觴と見做すことができる¹¹⁾。

さらに、椎名（1989）や守重（2011）が大学博物館の濫觴として挙げている東京大学理学部博物場は、前身である標本室が1877年に設置されているが、工部大学校博物場はそれ以前の1873（明治6）年に設置されていることから、工部大学校博物が大学設立当初から設置された大学博物館の濫觴と見做すことができる。

注

- 1) 本研究における「大学」とは、現代の大学に近い高等教育を行っていた教育機関を指し、現代の大学の前身となる学校・機関を含む。
- 2) 加藤・矢島（2011：208）を参考に、筆者考察。
- 3) 本研究における「初期」とは、明治政府が成立した1868年から日本において大学に関する最初の法律である、第一次帝国大学令が公布された前年の1885年までとする。
- 4) この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、

民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（後略）。

<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=326AC1000000285>（2021年10月21日取得）

- 5) 大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。（後略）

https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html（2021年10月21日取得）

- 6) 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。（中略）大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

https://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000944.html#joubun-toc-span（2021年10月21日取得）

- 7) 博物館資料とは、実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等を指す。
8) 木下直之（1997）：「大学南校物産会について」東京大学編『学問のアルケオロジー 学問の過去・現在・未来 [1]』、東京大学出版会。

http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DPastExh/Publish_db/1997Archaeology/（2021年10月21日取得）

- 9) 注8)と同じ

- 10) 北海道大学植物園 HP より引用。

<https://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/>（2021年10月23日取得）

- 11) 安高（2011）や加藤・矢島（2011）によると、盛岡高等農林学校（岩手大学農学部的前身）に設置された「動物の病気標本室」や秋田鉱山専門学校（秋田大学の前身校の一つ）に設置された列品室も早い時期に創設された大学博物館であるが、これら地方大学の大学博物館はいずれも1900年以降に設置されている。

参考文献

植村正治（2012）：「工部大学校（工学寮）における博

物場・器具室と実習諸器具について」『社会科学』第42巻、171-202頁。

加藤詔士（2016）：「お雇いスコットランド人教師 H. ダイアーと近代日本の工学教育」『愛知大学教職課程研究年報』第6号、1-33頁。

加藤克（2008）：「北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について：歴史的背景を中心に」『北大植物園研究紀要』第8号、35-91頁。

加藤克・市川秀雄・高谷文仁（2009）：「札幌農学校所属博物館における鳥類標本管理史(1)：東京仮博物館から札幌農学校所属博物館初期まで」『北大植物園研究紀要』第9号、29-94頁。

加藤有次・矢島國夫（2011）：「大学博物館」全日本博物館学会編『博物館学事典』雄山閣、208頁。

関秀志（1991）：「明治期における北海道の博物館(2)」『北海道開拓記念館調査報告』第29号、113-139頁。

椎名仙卓（1989）：『明治博物館事始め』思文閣出版。

椎名仙卓（2000）：『図解 博物館史〈改訂増補〉』雄山閣。

田川太一（2021）：「大学附属薬用植物園の歴史小考」落合知子編『医歯薬学系博物館事典』雄山閣、300-304頁。

棚橋源太郎（1950）：『博物館学綱要』理想社。

西村公宏・飯淵康一・永井康雄（2006）：「東京大学理学部博物館の建築と公開について」『日本建築学会計画系論文集』第602号、183-190頁。

西野嘉章（1996）：『大学博物館—理念と実践と将来と』東京大学出版会。

守重信郎（2011）：「わが国の大学博物館の起源と発展：大学博物館に焦点を当てて」日本大学。

横山尊雄・木村徳国・船木幹也（1961a）：「札幌農学校演武場の建築—演武場と博物館—その1—」『日本建築学会論文報告集』第69号、837-840頁。

横山尊雄・木村徳国・船木幹也（1961b）：「北大農学部附属博物館の建築—演武場と博物館—その2—」『日本建築学会論文報告集』第69号、841-844頁。

学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会（1996）：『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）—学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について—』

http://protist.i.hosei.ac.jp/science_internet/gakushin/UnivMuseum.html（2021年10月21日取得）

クラーク（1878）：『札幌農学校第一年報 1877』開拓使。（国立国会図書館デジタルコレクションにて

閲覧)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812785>

(2021年8月15日取得)

讀賣新聞 (1878.12.13) 朝刊3面 (「ヨミダス歴史館」にて閲覧)

<https://database.yomiuri.co.jp/> (2021年6月12日取得)

文部科学省 一 中央の教育行政機構 文部省の創設

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317606.htm (2021年12月20日取得)

文部省 (1878) : 『日本帝国文部省第六年報 明治十一年』。(国立国会図書館デジタルコレクションにて

閲覧)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809151>

(2021年8月15日取得)

文部省 (1880) : 『日本帝国文部省第八年報 明治十三年』。(国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809153>

(2021年8月15日取得)

文部省 (1879) : 『工部大学校学課並諸規則 明治18年4月改正』。(国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1939045>

(2021年8月15日取得)